

日本人が祀った論介という朝鮮女性

著者	魯 成煥
雑誌名	日本研究
巻	49
ページ	117-146
発行年	2014-03-31
その他の言語のタイトル	The Nongae Memorial : Japanese Enshrinement of a Korean Heroine
URL	http://doi.org/10.15055/00000429

日本人が祀った論介という朝鮮女性

魯 成煥

一 はじめに

韓国人ならば論介（ノンゲ）という女性を知らない人はいないだろう。韓国学中央研究院が出した『韓國民族文化大百科事典』は、論介について「晋州牧の官妓で、一五九三年（宣祖二十六）壬辰倭乱の時、晋州城が日本軍によって陥落した折に倭将を誘引し南江に投身して殉国した『義妓』」だと説明している。つまり、彼女の偉大さは、身分の低い妓生でありながら国家のために自分の命を惜しむことなく捨てたことにある。こうした正義の死は人口に膾炙し、また文献にも登場することにより一躍全国的に有名になった。

彼女の人気は現代社会でも衰えず、そのまま生きている。たとえば、一九七三年に映画監督の李亨杓（一九二一―二〇一〇）は、当時、

最も人気のあった俳優の申星一、金芝美氏らを主演にした映画を製作上映し、また、大衆に人気のあった歌手の李美子や李ドンギは「論介」という歌を作って巷に広めた。二〇一一年に芸術の殿堂で開かれた大韓民国オペラフェスティバルでは、論介が創作オペラによって演じられた。そして二〇一二年には、国立舞踊団が「論介」というタイトルの舞踊劇を国立劇場で公演した。このように論介は、壬辰倭乱以降、今日に至るまで韓国人の心の中に生き続ける人物である。

韓国人は論介に対して顕彰事業を行ってきた。それは晋州から始まった。一六二九年、鄭大隆（一五九九―一六六一）は彼女が飛び下りた岩に「義岩」という文字を刻んだ²。また、一六五一年の呉斗寅（一六二四―一六八九）による「義岩記」には、「論介の節義に対して春秋に祭祀を行う。そのすべては官妓たちがしている」という

記述が見られる。このように、論介への祭祀は十七世紀にすでに行われていた。一七二四年には、兵馬節度使の崔鎮漢（一六五二～一七四〇）と晋州士民の鄭拭（一六八三～一七四六）が中心となって「義岩事跡碑」を建立し、また一七四〇年頃には慶尚右兵使の南徳夏（一六八八～一七四二）が論介を祀る義妓祠を建て、論介の命日である六月二十九日を祭祀日とした。そして一八六八年になると、晋州牧使である鄭顯奭（一八六七～一八七〇年在任）が義妓祠を重修し、その年六月に妓女だけで義岩別祭を挙行した。こうした伝統を受け継ぎ、今日の晋州市民もその日に追慕祭を行っている。

論介の故郷である長水では、一八四六年に長水県監の鄭胄錫が「矗石義妓論介生長郷墅名碑」を建てた。碑文は鄭胄錫本人が創り、文字は彼の子の基永が書いた。これを基に、一九五四年には「義岩朱論介事跡保存基成会」が結成され、各界各層からの寄付により南山に義岩祠（論介祠堂）が建立されたが、その影幀は以堂・金殷鎬が描き、懸板の文字は当時の副大統領・咸台永の揮毫を刻字したものであった。また同年、同地に「論介影幀閣」と「義岩朱論介娘生長地事跡不忘碑」が建てられた。義岩祠の建立以降、論介が殉節した七月七日を選んで追慕大祭を行っていたが、一九六八年からはその日を「長水郡民の日」と定め、「郡民の日」の行事とともに追慕大祭することになっている。また一九八六年には、長水郡が長溪面大谷里にある論介の生家一帯の聖域化を宣言し、父母の墓を造成

するとともに生家などを復元し、毎年九月九日に「論介祭典」を行っている。

一方、咸陽郡は本来、論介とは特に関係がなかった。ところが、いつからか西上面金堂里方支里に論介と崔慶会⁵の墓があるという口碑伝承が生まれ、それを裏付ける資料として、呉治渥（八九年当時、六十一歳）氏の曾祖父、呉徳永氏が残した「遺稿集」に「崔慶会兵使長水県監晋州財殘長水義兵牧、崔兵使並義岩屍身運柩到安義県西上面芳池里堂小後麓安葬」という記録が発見された⁶。それを受けて、当時の咸陽郡守である崔洛健が論介および崔慶会の墓所を確定させ、本格的な整備事業を経て、毎年七月七日に論介追慕祭を行っている。このように論介は、晋州、長水および咸陽の地元の人たちによって一年に三回以上も祭られている英雄的人物である。韓国の歴史上最も偉大な世宗大王よりも、論介の方が祭祀の頻度は多い。もし、これが日本であれば、論介はおそらく神として祀られたことだろう。実は、日本でも論介を祀っているところがある。それは、九州北部にある英彦山の麓、もっと詳しくいえば福岡県田川郡添田町にある宝寿院という小さな寺院である。真言宗に属する寺院で、現在訪ねる人はほとんどおらず、廃寺に近い状況におかれているという。入口には大きな石碑が二つ建てられている。一つは「義岩朱論介墓碑永久保存会」、もう一つは「由緒史碑」である。前者には、永久保存会のメンバーの名前が記されており、後者には日韓軍官民合同慰

霊碑、毛谷村六助の墓、そして論介の墓を建てた経緯が記されている。正門から奥に入ると、右には観音菩薩像が立っており、その横には藤原妙心尼碑がある。そこを通り過ぎてさらに奥に入ると谷川が流れ、川の右手に本堂があり、その向かい側には「壬辰倭乱日韓軍官民合同慰霊碑」が、その左に朱論介、右には六助の墓碑が並んで立っている。そのほか、地藏菩薩像と「蓮を観じて自浄を知り、墓を見て心徳を覚る」と刻まれた石碑が六助の墓碑のすぐ傍にある。

寺刹の本堂には「木田孫兵衛之霊」とある位牌と「お園之墓」「お菊之墓」と記された石碑、そして「李命吉之霊」という韓国人の位牌をはじめ何人かの日本人の位牌が祀られており、正面には韓国から持ってきたと思われる蓮の燈が、また左の壁には韓国人の描いた東洋画が掛けられていた。

入口の「由緒史碑」の記述には、この寺は一九七六年四月に建立されたとある。一体誰が、そしてなぜ、誰も住んでいない山中に宝寿院という寺を造ったのか。また韓国にあるはずの論介の墓がなぜここにあるのか、また本堂に祀られている位牌の主である木田孫兵衛（六助）をはじめ、お園とお菊といった人々は一体誰なのか。そして、壬辰倭乱の際に死んだ韓日の霊魂を慰める合同慰霊碑がなぜここにあるのか、また建立されてから四十年も経たない比較的新しい寺なのに、どうして廃れているのだろうか。疑問は次々と生じてくる。その中でも、論介の墓がここにある理由が特に理解できない。

一九九四年十月二十三日の『朝日新聞』（夕刊）に、宝寿院は上塚博男が建てたという記事があった。⁸ 宝寿院については、一九九六年五月に田畑博子⁹により、また二〇〇五年三月には岩谷めぐみ¹⁰により、その建立の事情が日本の学界に少し紹介されていた。そして韓国では、一九九六年に国文学者の金茂祚がこの事実を知り、新九州営財株式会社の社長である上塚が一九七二年に土地を購入し、一九七六年に論介の墓を建てたと韓国の学会に知らせた。¹¹

この上塚博男という人物は、何のために、このような場所に論介の墓を造ったのだろうか。これに対して小説家の鄭棟柱は、上塚は倭将六助を敬慕する人物であり六助の恨みを昇華させるために彼と論介を夫婦にしようとしたのではないかと推測した。¹² もしもこの推論が事実であれば、民俗学的な立場からも興味深いテーマである。というのも、日本には韓国の民俗風習として見られる死後結婚がそれほど多くないからである。だが、現在、上塚が住む九州に死後結婚の事例は一つもない。その上、一般には、死後結婚という民俗風習そのものがあまり知られていない。それにもかかわらず、上塚はどうしてこのような行為に至ったのだろうか。こうした疑問を解くために、添田町の関係者の協力を得て、寺刹の建立者である上塚を訪ねた。彼は現在田川市に住んでいた。今日の田川市は静かな中小都市であるが、かつては有数の鉱山地域として多くの人々で賑わっていた。そして、かつて韓国から来た労働者が大勢働いていたとこ

ろでもあった。

彼はどのようなわけか、最初は韓国人である筆者に会うことを頑なに拒絶したが、迂余曲折の末、ようやく会うことができた。彼は一級建築士として建築事務所と工務店、不動産会社を経営していた。つまり、主に建築関係と不動産業に従事している人物であった。

彼を通じてこれまでまったく知られていなかった多くの事実が判明した。彼によって建てられた宝寿院は、一言でいえば、韓日民間外交における和解と葛藤の歴史そのものだった。本稿では、彼との面談をはじめ、論介の故郷である晋州市の言論および地域関係者との面談調査などを通じて手に入れた資料を元にして、まず、事の顛末を紹介した後、歴史民俗学的な観点からアプローチし、それがどのような意味を持つのかを探ってみたい。それにより、論介の墓が日本にある理由はもちろんのこと、韓日両国の靈魂観の特質を把握したい。

二 宝寿院の建立動機

意外なことに、上塚は晋州では早くからよく知られた人物であった。彼は一九七四年から論介のために晋州を何回も訪問し、一九七六年には論介の墓を自分の土地に造った。これに対して晋州市は一九七七年に感謝牌と晋州市の花木を寄贈した。つまりこれは、

韓国の烈女である論介の墓碑を日本人が建てたことに対する感謝のしるしであった。

上塚は小説家の鄭飛石によって紹介されたこともある。鄭飛石は自作品「論介」の最後の部分で、論介が抱きかかえて一緒に死んだ倭将の六助は日本で優れた剣客として有名な人物であるにもかかわらず、敵国の美女の手によって殺されたという理由から墓も造られなかったこと、そしてそれを遺憾に思った九州大分県の有志が一九七四年に建築士の上塚を派遣して晋州の土を持って帰らせ、英彦山の麓に墓碑を造った、と叙述している¹³⁾。

しかしこの部分の記述は正確ではない。上塚は大分県民ではなく、福岡県民であり、また地域の有志らが派遣したわけではなく、上塚が単独で行ったのである。さらに、晋州の土を持ち帰り、六助の墓を造ったというが、六助の墓とされる場所はすでに名護屋と毛谷村にあった。また、先前にも触れたように、上塚が建てた宝寿院には六助の墓碑とともに論介の墓碑もある。彼は六助だけではなく論介の墓まで造ったのである。

彼は奇異な行跡と表現したくなるような独特の経歴を持っていた。父親を早くに失い片親の家庭で育てられた。母は数人の女性を雇う、いわゆる風俗店の店主であった。幼い時から体を売る若い女性たちとともに生活のために戦い続ける母の姿を幼い時から毎日見ながら成長した。彼の表現を借りれば、「過労と精神的肉体的に苛まれな

がら、その多くは結核病の為、痩せ細りそして血を吐きながら自分の母と叫び苦しみの中に果てて去った」様子も見た。¹⁴ それに対し、自分は母親の庇護の下、支援を受け何の苦勞もなく高等教育を受けることができ、建築設計士になって、郷里で長い間建築関係の仕事をしているという。

彼が論介と六助に執着する理由について、韓国では、彼が六助の直系子孫だからだ、という見方が一部にあった。¹⁵ しかしそれも事実ではない。六助は子孫を残さなかった。また、もし彼の子孫がいたとしても、子孫の姓は上塚ではなく、木田あるいは貴田、喜田でなければならぬ。なぜなら、武士になってから六助は貴田統治または貴田孫兵衛と名乗ったからである。

血縁関係のまったくない上塚が六助と論介に拘るのは、次のような事情があるからだ。債務処理で宝寿院のある土地が自分のものになった。そこは元々人家もない山間の奥地だった。彼はその土地を遊ばせておくのはもったいないと思い、活用しようと考え始めた。そして、そこに母親の店で命を失った女性のために寺を造り、観音菩薩像も安置した。彼の行動はそれにとどまらなかった。寺建立の途中で二つの石碑を見つけたが、一つはお園、もう一つはお菊という女性の墓碑であった。調べた結果、彼女らは父親の敵討ちのために婚約者の六助に協力を求めにきた女性であった。お菊は志半ばでこの地で敵に殺害され、お園はその後、六助と一緒に小倉城で父親

と妹の敵を討ったことがわかった。この話は「彦山権現誓助剣」という歌舞伎の題材にもなっている。

実際の六助は加藤清正の十六将の一人で、名字は木田、喜田、貴田、名前は統治または孫兵衛とされている。『清正代侍略記』には俸禄九百石の武士として記され、『清正行状』の「高麗国出陣武者分備定」には、壬乱の際、鉄砲部隊四十名を率いて朝鮮に出兵したことになる。彼は怪力と駿足で有名であった。漢陽（ソウル）が陥落すると伝令のために走り、わずか二週間で日本陣營の名護屋に伝えたともいわれている。そのため、朝鮮で戦死した後、彼の遺体は名護屋に運ばれて埋葬され、そして彼の名前をとった喜田神社が建てられた。彼は死んで神になったのである。今日も地元の人々は、六助を足の病気を治し、足を丈夫にしてくれる神として祀っている。この六助が自分の土地と縁があると知った上塚は、彼らの魂を祀りたいと思い宝寿院を建立したのであった。

また彼は偶然、ある韓国人から六助の死について次のような話を聞いた。それは、壬辰倭乱で晋州城が陥落し勝利した日本軍が戦勝の宴を開いた時のことである。論介という妓生が倭将に抱きついて川に飛び込み、二人とも溺死したというのである。それを聞いた上塚は六助と論介を関連付け、また話を飛躍させて小説に近い場面を想像した。それは、彼の書いた「六助墓碑建立趣意書」によく表れている。¹⁶ 関連する部分を紹介すると次の通りである。

夕日に赤赤と燃える南江の水は血で真赤に染まり異様さを増していた。その殺伐たる光景はあたかも生地獄の様相を呈し、戦役とは言えこれが人間のなせる業だろうか、因果とはいえ空しいものであると六助は岩の上より両眼を閉じ心静かに合掌して、今は無き両軍将兵の冥福に耽っていた。その時背後よりしのびよっていた手が突然首に巻きついた。その十本の指には玉のついた指輪が夕陽にきらりと光った。それは妓生論介の華奢な指であり、その細い手に満身の力をこめて六助の体を押した。瞬間六助は全身をもって振り回したが、足元が滑り前にのめって論介と共に水中に没した。¹⁷

これはあくまでも彼の想像によって生まれた場面であるが、六助の人間性が非常に強調されている。すなわち六助が岩場に渡ったのは、酒に酔い論介の色香に引かれたからではなかった。彼は、川の水が血で赤く染まるほど周辺に遺体が散らばる中で開かれた戦勝の宴の席で、論功行賞をめぐって対立する雰囲気嫌気がさし、また戦死した部下たちのことを考えると戦争の意味がわからなくなり、人生が空しく思われたので、岩場に渡り両軍の戦死者の冥福を祈るうとした。そしてまさにその時、論介が後ろから六助を押して無理心中したのだ、と上塚は想像した。いや、想像したというよりは、六助は晋州で妓生論介により殺された、と信じたのである。

もちろんこれは史実ではない。韓国の文献には、論介が殺した敵将の名前は一切出てこない。柳夢寅（一五五九―一六二三）の『于野談』には「倭将」、呉斗寅（一六二四―一六八九）の『義岩記』には「倭人」、十七世紀半ばの文人である閔順之の『壬辰録』には「敵将」、朴泰茂（二六七七―一七五七）の『義妓伝』には「酋長」、丁若鏞（一七六二―一八三六）の『晋州義妓祠記』には「倭酋」とあるだけで、どこにも「六助」という具体的な名前は出てこない。それにもかかわらず、六助が論介に殺されたと信じた上塚は、六助に対する憐憫の情を深めていった。このような心の動きは、彼が書いた「私と桔梗」という随筆によく表れている。彼は数日間市立図書館に通いつめ、壬辰倭乱に関する歴史書を熟読した。そのうち不思議な夢を見た。乱れた髪と白い服を着た男が川岸の岩に背をもたせて立っていた。「あなたは誰ですか」と聞くと、その男は苦しそうな表情をして「私は毛谷村六助だ」と答えた。そして数日後にまた違う夢を見た。大門をくぐったら大きな建物があり、その中に韓服のチマチョゴリを着た三人の女性が立っている。その中の一人が自分に階段の上上がるよう手を振っている夢を見た。このような夢を連続して見た彼は、その後、一九七三年に晋州を訪問し南江に立ち寄った際に驚いた。なぜなら夢で見た大門は轟石門、建物は轟石楼だったからである。¹⁸このような信じられない経験をしたというのである。

その後、上塚は晋州で何人かの関係者に会ったが、護国寺の住職である玄山から様々な話を聞いた。玄山は六助の魂を帰還させることも大切ではあるが、それより先に論介の魂を慰めなければならなといった。論介は六助に抱きついて死亡したので、論介の恨みから六助の魂を解放してやらないと、いくら努力しても六助の魂は晋州の南江から離れられない、というのが彼の説明であった。この話に納得した上塚は、六助の代わりに論介に謝罪し、論介の魂を祀ろうと心に決めた。そして六助が成仏できれば、彼の家族であるお園やお菊がどれほど嬉しく思うだろうかと考えた。そこで彼は、六助の魂だけではなく論介の魂も一緒に日本へ持って帰ろうとしたのである。また玄山は、論介と六助を含めた、晋州城の戦いで戦死した韓日両国軍官民の霊魂を慰める合同慰霊碑を建てることも勧めた。¹⁹⁾

これを受けて上塚は、自分の土地に論介と六助と一緒に祀る宝寿院を建立することを決意し、寺を開くまで頭髮と髭を切らないと誓った。まず彼は、朱論介の墓を造るために墓石を論介の故郷である全北・長水から購入し、その墓石に刻む「朱論介墓」という文字を当時の福岡韓国総領事である朴任洙氏に依頼して書いてもらった。それから一九七六年二月に晋州南江の義岩付近に菊花を撒き、折り紙で作った千羽鶴を川に流して論介と六助の二人の霊魂を迎える儀式を執り行った。²⁰⁾そこですくい取った小さい石を護国寺で魂入れの儀式を行った後に日本へ持ち帰って論介の墓の下に埋めた。また晋

州の画家が描いた論介の影幀を、六助の位牌そしてお園とお菊の墓石がある宝寿院の本堂に掲げた。さらに六助と論介の墓の間に「日韓軍官民合同慰霊碑」を建てた。境内には韓国の国花であるムクゲと全北の花である百日紅、そして晋州市花である石榴を植えた。一九七五年に論介祠堂に参拝した九州の有志らが論介を韓国のジャンヌダルクだと評価し、同年五月の六助の命日に論介の研究家である金相祚教授を招請した、と鄭飛石が記述したのは、おそらくこれらの出来事を指すのであろう。²¹⁾

晋州城の陥落日である旧暦六月二十九日には、毎年、この宝寿院で合同慰霊祭そして論介と六助の鎮魂祭が行われてきた。この式典には晋州と長水地域の有力人士が参加し、福岡の韓国領事館の関係者も参加した。鎮魂祭で用いられる言語は、韓国語続いて日本語である。国歌も韓国が先で、次に日本の国歌が流される。また献饌として韓国の餅も供えられた。その日は、宝寿院の周りを太極旗と日の丸が一緒に風にたなびくのである。²²⁾このような上塚の努力は、まさに韓日両国の和解と平和に貢献する国際親善の行事であるかに見えた。

三 憤激する韓国人

このような彼の一連の行為に対しては、国内外から大きな反響が

あった。日本では論介について様々な伝承が語られ始めた。戦争中に六助に出会った論介は戦後日本に渡り六助と仲よく暮らし天寿を全うしたという話⁽²³⁾もあれば、論介の正体は日本人女性であり婚約者の六助とともに朝鮮に出兵して現地で死んだという話や、六助の朝鮮の現地妻であるという話まで生まれた⁽²⁴⁾。また、宝寿院では、論介は、そこを訪ねる日本人にとって、夫婦関係を円満にし子どもを授ける神として祀られていた。「夫婦関係がよくなりましたね」⁽²⁵⁾「論介様にお願ひして息子二人を産んだのよ」など、宝寿院で論介にお参りした日本人女性のインタビューがMBCのTV番組を通じて韓国全土に流された⁽²⁶⁾。また在日韓国人である辛基秀氏も、論介の肖像画が六助の傍に置かれているだけでなく、論介が「夫婦円満」「子孫繁昌」の神として祀られていることを確かめてくれた⁽²⁷⁾。つまり、論介は日本に渡って神となり、日本人の趣向と解釈によつて事実とはまったく違う方向に変わっていったのである⁽²⁸⁾。

一方、韓国側でも上塚や宝寿院について誤解があった。たとえば、ある雑誌に「宝寿院のある土地には昔からの仮墓が二つあるが、壬辰倭乱の際、晋州で戦死した武将の奥さんと彼女の妹の墓だということを知って、上塚がその周辺に花を植え浄化事業をした⁽²⁹⁾」という記事が載ったことがある。これを見た金茂祚が、この武将の妻を論介だと誤解し、論介には妹がいないと指摘した上で、上塚は事実までも歪曲していると憤怒するということがあった⁽³⁰⁾。また、鄭棟柱も

上塚の行為を「我が民族史のアイデンティティと純潔性を毀損することだと厳しく批判を加えた⁽³¹⁾」。

論介が日本で祀られていることを見て激怒する韓国人は他にもいた。それは、海州崔氏光州全南和順郡宗会の人たちであった。彼らは晋州城で戦死した崔慶会の末裔で、十七世紀の文人、閔順之の『壬辰録』などの記録を証拠に、論介は一五七四年に全北長水で生まれ、一五九〇年に幼い時の縁により崔慶会の側室となった婦人だと確信した。一五九三年に慶尚右道兵馬節度使である崔慶会が第二次晋州城の戦いに破れ自決すると、一緒に戦闘に参加した朱論介婦人は悲しさと義憤を押さえず、倭敵の戦勝の宴に妓生に変装して入り、酒に酔った敵将六助に抱きついて南江に身を投じたというのである。彼らにとって、論介は自分の祖先と結婚した女性であった。言い換えれば、論介は崔氏門中の人間で、国のために忠節を、夫のためには貞節を守った誇らしい祖先であった。そのため、彼らにとって、夫と祖国の敵を処断した論介の影幀と墓が当の敵将とその家族が祀られている寺院にあるというのは、いかなる理由から受け入れ難いことであった。それは、論介婦人と崔慶会にとつてだけではなく、民族の歴史そのものを侮辱し蔑視するものであり、それらを一日も早く撤廃すべきだと主張し、歎願書を青瓦台、外交部、商部、晋州市、国民苦衷処理委員会、文化観光部、女性部、監査院、行政自治部、国務総理室などの政府機関に次々と提出したのである。

さらに彼らはソウルで「政府は日本に売られて日本に渡った論介婦人を取り戻せ」という垂れ幕を掲げ、街頭集会を開いた。また一九九八年八月十日には日本を訪問し、宝寿院の入口を封鎖する封印状を貼った。その封印状には、義岩婦人の靈魂・影幀および墓碑の返還、合同慰霊祭の廃止などの要求が記されていた。³³このように、彼らは論介が日本人によって日本で祀られていることに対し激しく抗議したのである。

論介の郷里である晋州の人々も黙っていなかった。地元のあるTV局は、一九九六年八月十五日の特別番組で「論介はなぜ日本に行ったのか」というドキュメンタリーを制作して放映した。そして晋州文化院の日本探訪団は宝寿院を訪問した後、次のような立場を表明した。「一九七〇年、日本人が六助の事跡を探しに晋州城を訪問し、そこで論介が殉国した事実を知って、南江から魂を連れ帰って宝珠院〔宝寿院の誤記〕という寺を建てた。また、そこに六助と論介の墓を建て合同慰霊祭を行っている。朱論介の墓を造ることにより論介と六助が死後結婚云々とする日本人の奇想天外な言動には身の毛がよだつ」と述べ、また「墓とは屍体や遺骨を埋葬した場所をいう。〔宝寿院にある〕論介の墓がそのまま何百年も経てば、後世の人々はそれを本当の論介の墓として認めるかもしれない。そう想像すると、魂が失われるほどつらいことである」と述べ、「今後を考えた場合、それはすぐに撤廃しなければならない」と主張した。³⁴

また、鄭棟柱は、「論介の正義の死が朝廷から公認されるのによそ一四七年、また彼女が妓生ではなく義兵将の婦人であったことを確認するのに四百余年もかかった。敵将六助と一緒にいる彼女の影幀と靈魂が故国に帰り安らかに眠るのに、これからどのくらい永い時間がかかるのかわからない」と嘆いた。³⁵晋州の言論人である尹成孝は「論介を辱めるな」という文章を通じて、日本の論介の祠は当然撤廃すべきだと強く主張した。³⁶

このことがマスコミに知られ、『韓国日報』『ハンギョレ新聞』『晋州新聞』や晋州文化放送など、中央・地方の新聞社や放送局がそれぞれ報道した。特に国営放送のKBSは「水曜企画」という番組でこの「事件」を大々的に取り扱い、全国に流した。それを受けて行政機関も慌ただしく動き始めた。二〇〇〇年八月、金相斗長水郡守が日本を訪問し、上塚と協議した結果、墓碑は円仏教の福岡教堂に、影幀は福岡総領事館が預かり処理することで合意に至った。また、今後、合同慰霊祭に福岡の総領事館側から関係者を参加させない方針が決まった。毎年参加していた晋州と長水の人たちも参列しなくなり、彼らは合同慰霊祭に関して語らなくなってしまった。この結果、宝寿院の「韓日両国軍官民合同慰霊祭」は中止されることになり、論介の影幀は韓国側に返還され、晋州市長から授与された感謝牌も宝寿院から自宅に移された。その結果、宝寿院の参拝者も急激に減り、現在は藪のなかの廃寺と思うまでにすっかり廃れて

しまった。だが、いまだにそこには石で作られた論介と六助の墓として韓日両国の「軍官民合同慰霊碑」が放置されているのである。

四 伝承と史実としての論介と六助

(一) 矗石楼での戦勝宴

こうした一連の「事件」は、まさに歴史と伝承の混交と混同から生じた結果であった。ここでは、論介をめぐる出来事が史実として確認できるか否かについて検討しよう。最初に指摘できるのは、晋州城が陥落した後、はたして矗石楼で日本軍の戦勝の宴が行われたのかという問題である。これを前提にしないと、論介の逸話は成り立たない。その意味でも重要なことである。この点については、韓国の研究者の中でも懐疑的な意見が少なくない。たとえば韓国文学者の金守業は、矗石楼で倭軍のパーティは行われず、論介が義岩で踊り歌ったという事実もない、すべては後世の人が想像したものだ⁽³⁸⁾と主張した。その理由として、金守業は、十日間続いた晋州城の戦いで死んだ日本軍の数は数え切れないほど多く、城の周りは日本軍の遺体で覆われていた。そして生き残った日本軍は辛うじて戦列を整え、二日後には二手に分かれて湖南に進撃したが、南に行った部隊は河東で、北に行った部隊は山清でそれぞれ朝鮮軍の攻撃を受け、釜山方面に退却せざるをえなかった。このような状況であった

ので、矗石楼で大酒宴を開くなどということはありえない、と断言した⁽³⁹⁾。つまり、戦勝の宴を楽しむ余裕はなかったと見るのが、彼の主張である。

現在の矗石楼は、一五九三年（宣祖二十六）六月二十九日の第二次晋州城の戦いで城が落ち七万人の民官軍が殉節した際に焼失したものを、一六一八年（光海君十）に兵馬節度使である南以興（一五七六―一六二七）が重建したものである。『宣祖実録』には、城が落ちると金千鎰（一五三七―一五九三）、崔慶会（一五三二―一五九三）、高従厚（一五五四―一五九三）らが矗石楼に火を付け殉死しようとしたが、失敗に終わり、最期は川に身を投じて自決したとある⁽⁴⁰⁾。これによつて矗石楼は被害を受けた。一七二五年に鄭拭（一六八三―一七四六）が『矗石楼重修記』に「醜いほど燃えたが、辛うじて倒れることは免れた（幸免於凶炬蕩殘之患）」と記録しているように、その被害は甚大であった⁽⁴¹⁾。また、『宣祖実録』によると、城が落ちた直後に日本軍は晋州城を離れ、丹城、山陰、求礼、光陽、南原、順天などに分かれて入り、村を略奪したようだ⁽⁴²⁾。

以上から考えると、城が陥落した日、矗石楼は朝鮮軍が放った火により相当部分が焼失したことがわかる。したがって、金守業が主張するように、そこで日本軍が戦勝の宴を開くことは不可能であり、宴会の最中に美女論介が現れて敵将を誘引し、抱きついて溺死したという話も成り立たない。だが、多くの人々は、城が陥落した後に

轟石楼で戦勝の宴があり、そこに論介が登場したのだと信じている。上塚を含み多くの人々が史実だと信じたがゆえに、論介は日本人の上塚の手によって日本へ渡ることになったのである。

(二) 論介が殺した敵将

論介とともに溺死した敵将が誰なのかについても、実は詳らかではない。金子尚一は、『大日本地誌大系』の「豊前志」に「六助……朝鮮に渡り軍功を立てたが、ついにそこで戦死した」という説明があることから、論介とともに死んだ倭将は六助かもしれないと推測した⁽⁴³⁾。それに対して田畑博子は、論介と一緒に死んだ武将の名前が六助だという証拠は韓国側の文献のどこにも見つけられないことを指摘した上で、現在は誰だと断定できない状況だといっている⁽⁴⁴⁾。

一方、韓国では、六助説と誰であるかわからないという説に分かれている。前者には、姜大敏、崔官、金京欄などの研究がある。姜大敏は小説家の朴鍾和(一九〇一～一九八二)および鄭飛石(一九一一～一九九二)の意見をそのまま受容し、論介に抱きつかれ死亡した武将は六助である可能性が高いと述べている⁽⁴⁵⁾。これに対して崔官は、清正が主力部隊をオランカイから引き上げて咸鏡道の安辺に駐屯させていた一五九二年十月に、揮下の部隊に送った書信に六助の名前である貴田孫兵衛が見られることを指摘し、六助がオランカイ戦闘

後も生きていたことは事実であり、清正軍が参戦した一五九三年六月末の晋州城の戦いで死亡したのだろうと推測した⁽⁴⁶⁾。同様の解釈は金京欄によってもなされた。彼女は、日本泳法一派である神伝流の発祥を説明する文書に、貴田孫兵衛は朝鮮で戦死した、と記録されていることから、六助は晋州の論介と一緒に溺死した可能性が高いと見なした⁽⁴⁷⁾。しかし、これらの主張を証明できる明確な資料はいまだに発見されていない。だから彼らの意見は推論であって確定ではない。

一方、晋州に住む研究者の意見は異なる。たとえば金守業はこの問題について、次のように詳述している。

事実、癸巳年に義岩で論介が殺した敵将は誰だったのか、我々は知るところがなかった。我が国の漢文記録は四百年にわたり、倭将、敵将、賊将、倭酋、賊首あるいは倭または賊と書くのみであった。彼が誰だったのか身元を明らかにすることができない、という事実には忠実だった。ところが民衆の口から口へと伝わる話や歌には相当早くから敵将の名前が出ており、その点が漢文記録とは異なっている。壬辰倭乱の後、口碑で伝承されている話を集めて十九世紀に編集し出版された小説『壬辰録』などは、論介が殺した敵将を清正、平秀吉、石宗老としている。そして一九一三年頃に書かれたと見られる司空燧の「漢陽歌」

では、成從奴、石宗老、賀羅北、河羅北、漢我服などと歌っている……そして光復後に聞き取った民衆の歌では、どれも論介が清正の首に抱きつき南江に身を投じたと歌っている。……一九六〇年代に入ると、人々は再びその敵将の名前に注目した。

まず裴鎬吉は「晋州 轟石楼と朱論介」で、その敵将を『壬辰録』と『漢陽歌』がいうように石宗老だと述べ、彼は加藤清正軍の部隊長だったと主張している。そして政府記録である『土郷誌』や『文化遺跡総覧』などは、これをそのまま受け入れている。ところが、朴鍾和は「論介と桂月香」という小説で、その敵将は加藤清正の部下で晋州城攻撃の先鋒将であった毛谷村六助だと述べた。それ以来、崔容鎮、田炳淳、鄭飛石、鄭棟柱といった文人たちはもちろんのこと、震檀学会の『韓国史』、李弘植の『国史大辞典』、晋州市の『晋州市史』といった歴史書もそれを受け入れ、「毛谷村六助説は」定説となった⁽⁴⁸⁾。

このように、金守業は、論介によって無理心中させられた敵将が誰だったのかはつきりわからないと述べている。史書には、倭将、敵将、倭酋、敵首あるいは倭または敵と表現されているのみで、具体的ではない。一方、口頭伝承の世界では、清正、平秀吉、石宗老、成宗老、賀羅北、河羅北、漢我服など、様々な名前が登場する。そのほかにも、一九六〇年に当時の長水教育監、金祥斗が長水朱村の

入口に建てた「義岩朱論介娘生長地事跡不忘碑」では、立花宗茂（一五六七～一六四三）となっている。『湖南節義録』では敵将が二人になっており、近年採集された民間伝承では「ダイトウ」と正体不明の人名になっている⁽⁴⁹⁾。

石宗老、成宗老、河羅北といった名前が誰を指すのかは詳らかでないが、清正は加藤清正を、平秀吉は豊臣秀吉を指すのいうまでもない。しかし清正と秀吉は朝鮮ではなく日本で死亡している。そして立花宗茂も朝鮮ではなく、一六四二年に柳川で死んでいる。このように、彼らは論介の死とはまったく無関係であるにもかかわらず、韓国の伝承では論介と一緒に死んだ人物となっているのである。

一方、六助の朝鮮死亡説は早くからあった。だが、彼が晋州で死んだ証拠はどこにもない。日本側の資料では、彼の死亡地として様々な地名が挙げられている。たとえば日本泳法の神伝流の説明文ではただ朝鮮で戦死したとのみ記されているが、武内確齋の『絵本太閤記』にはオランカイで女真族が投げた剣が左肩に当たり戦死したとある⁽⁵⁰⁾。『清正記』と中野嘉太郎の『加藤清正伝』も、オランカイで女真族の剣が首に刺さり死んだと記している⁽⁵¹⁾。また彼の郷土の史誌である『下毛郡史』には「朝鮮出陣中オランカイで戦死した」と簡略に叙述されている⁽⁵²⁾。このように、彼の死亡地が中国の東北地方のオランカイだという見解は早くからあった。

しかし、これと異なる見解もある。たとえば名護屋地域の郷土史

教育資料として活用されている『名護屋読本』には、一五九八年一月の蔚山城の戦いの折に三十九才で戦死し、首が日本へ持ち帰られ麥原に埋められた後、そこに喜田神社を建てて神として祀った、という説明がある。浄琉璃の『大攻艶書合』（一七八七年）に、六助は貴田孫兵衛宗春として、そしてお園は園菊と名前を変えて登場するが、園菊が夫の代わりに朝鮮に出兵してオランカイで戦死し、孫兵衛は出家して宗春法師という名前で故郷の毛谷村に帰るという筋書きである。⁽⁵³⁾ また毛谷村に伝わる「毛谷村六助略縁起」には、六助は二十六歳になった一五九三年六月に朝鮮に出兵し勲功をたてたが、その後帰郷し、六十二歳（一六三一年）まで生きていたと書かれている。⁽⁵⁴⁾ このように日本の記録では、六助の死亡地として、晋州の南江をはじめ、中国の東北地方、蔚山および彼の郷里など、様々な地名が挙げられている。

一方、文献上で、論介の相手として六助が登場するのはそれほど古いことではない。ノルウェイの研究者Vladimir Tikhonovniによると、韓国の文献に論介の相手役として六助が登場したのは、一九〇八年に出版された『初等大韓歴史』においてである。ここに、初めて彼の名前が登場し、その後、六助の名が定説化されたと主張している。⁽⁵⁵⁾ しかし、これは誤解だといえる。ここでは、酒に酔った日本武將を論介が背負い身を投じたことになっており、敵將の具体

的な名前が示されていないからである。

一方、韓国文学者の朴基龍によると、韓国において、毛谷という名前は一九三四年の『毎日申報』にはじめて登場する。その後、六助あるいは毛谷村六助という名前で現れるようになるが、その出典はすべて曖昧だといえる。⁽⁵⁶⁾ だが、これも事実ではない。実際には、それよりもやや早い一九三二年に出た『朝鮮仏教』（八十號）の「俠妓論介——死をもつて貞節を守る」に六助の名が初めて登場する。それによると、論介は徐礼元の愛妾妓生であり、徐が戦死するとその後を追って断崖絶壁から川に身を投じようとしたが、敵將が論介を制止し、説得しようとした。そうして揉み合ううちに、論介がその敵將に抱きついたまま川に身を投げた。その敵將の名前が毛谷村六助であると記している。続いて、六助の名は一九三四年の『毎日申報』にも登場し、以後、論介と一緒に無理心中した敵將は六助となったのである。

六助の名が現地に伝わるのに、それほど時間はかからなかった。植民地時代の晋州では、敵將の名前はすでに六助で定着していた。⁽⁵⁷⁾ 川村湊は、玉川一郎の小説『京城、鎮海、釜山』には「晋州の小學校の日本人教師が六助の話をすると、生徒らが、先生、その先知っているわ。六助が妓生にだまされようで、抱きつかれてまんまこの矗石楼から南江にはまりよって、溺れよったんや。助平なやつ」と答える場面があると指摘している。また一九四〇年に日本人の勝

田伊助が記した『晋州大観』は、「巷に伝わる義妓論介が殺した倭将を毛谷村六助であると言うが、六助はオランカイで戦死したというのが通説であり、また「六助略縁記」によると、壬辰倭乱後に郷里に帰り余生を過ごしたとなっている」と指摘した上で、「とにかく南江に投身し、溺死したのは虚説」だと主張している。⁽⁵⁸⁾このように植民地時代の晋州においても、論介とともに溺死した倭将は六助であるというのが定説になっていた。それゆえ、六助が登場したのは一九六二年の朴鍾和（一九〇一―一九八二）の作品「論介と桂月香」以降だ、という説は成り立たない。

歴史小説家の朴鍾和が初めて六助を論介の相手として登場させたのは、それよりも前の一九四六年に出した短篇小説「論介」においてである。そこでも論介が殺した敵将を六助としている。おそらくこれは朴の創作ではなく、当時晋州で伝えられていた内容をもとにしたものと推測できる。一九五四年には晋州の老妓の集まりである義妓暢烈会が論介を偲び「義娘論介の碑」を晋州城の中に建てたが、その際、碑文に毛谷村（一説には石宗老）と敵将の名前を刻んでしまったという。⁽⁵⁹⁾一九七五年に長水郷校が編纂した『碧溪勝覧』においても、毛谷村六助説が既定の事実として記録された。このような一連の過程を経て、六助は論介によって無理心中させられた人物になったのである。

以上、見てきたように、論介の伝承に六助が登場したのは二十世

紀に入ってからである。では、なぜ、六助が登場することになったのだろうか。それにはそれなりの理由があるはずである。ここに注目した川村湊は、六助の血統が韓国と関連を持っているからだという仮説を立てた。すなわち、六助の先祖が高良明神の神職で、また彼の出生そのものが英彦山権現に祈った結果であるという伝承が存在しているが、それに注目し、高良明神は高麗明神の別称であること、また英彦山の開山始祖である藤原恒雄は韓国の始祖・檀君の父親である桓雄と名前が同じであることから、六助は古代韓国系の子孫だという認識が日本人の無意識あるいは集合的無意識の中に残っていて、それが六助と論介を結び付けたのであろうと、推定したのである。⁽⁶¹⁾

遠い先祖が韓国系だという理由だけで韓国で論介に殺される犠牲者として選ばれた、という論理はあまりにも単純である。より具体的な理由があると思われる。朴鍾和は一九四六年の作品「論介」を通じて、論介が六助を選んだのは加藤清正と誤認したからだと説明した。しかしこれもまた作家の一個人の推測の域を出ず、検証が行われたことも、それを証明するようないかなる資料もない。

ところがまったく端緒がないわけでもない。ここに注目すべき文献として、前出の浄琉璃『大攻艶書合』を挙げる。それによると、六助は朝鮮侵略の際に先鋒に立つべき人物であったが、出陣すると必ず凶事が生じるといふ占いの結果が出たので、清正の配慮で出陣

のメンバーから外された。これを知った六助は密かに朝鮮に渡り、八百屋陵雲という仮名を使って暗躍し、別の意図をもって朝鮮人女性の傾城蘭麝に接近して恋仲になる。後日、そのことが発覚して蘭麝が自殺するという結末を迎える。⁶²⁾

ここで見られるように、朝鮮に渡って朝鮮人の妓生と恋に落ち、最後はその妓生が自殺するというくだりは論介の伝承と通じるところがある。さらに彼女の名前の「蘭麝」は韓国語の発音の上からも「論介」を連想させるし、また六助の「助」と論介の「介」も日本語の発音は同じである。また『大攻艶書合』でも、六助の妻お園は朝鮮の忠臣晋伯の娘という設定である。このように『大攻艶書合』においては、彼の妻も恋人も朝鮮人女性であった。また、別の伝承ではあるが、彼は朝鮮で死亡したことになる。⁶³⁾

さらに、岩谷めぐみによると、六助説について初めて記述した『朝鮮仏教』は一九二四年五月に朝鮮居住の日本仏教系の著名人士と親日派の朝鮮の知識人で構成された朝鮮仏教団の機関紙であり、その目的は朝鮮における植民地政策を円滑にするための人民教化にあったという。⁶⁴⁾ まだ断言することはできないが、このような団体に所属した日本人を介して、先のような六助のイメージが伝わり、またそれが論介の伝承に結び付けられたことにより、論介の殺した敵将が六助になったと推定される。このように六助の死亡地はいまだに不確かであり、韓国側の論介をめぐる文献の中に彼の名前が登場

したのも二十世紀に入ってからである。

(三) 論介の正体

論介という人物の実体もはっきりしないところが多い。漢文学者の鄭出憲は、次のようなとても興味深い解釈をしている。すなわち、「殉節した武将の後を追うのは大概賤妾や妓生であり、それは一つの公式のようになっていく。ここに現れる女性、妓生、奴婢らは忠節の男性を目立たせるための脇役であった」と述べ、その例として鄭撥（一五五三―一五九二）と愛香、宋象賢（一五五一―一五九二）と金蟾、金應瑞（一五六四―一六二四）と桂月香などを挙げ、論介も武將の崔慶会と対になっていると見なした。⁶⁵⁾ 彼の表現を借りれば、論介は男性英雄伝の公式に基づいて創られた英雄だったのである。⁶⁶⁾

彼の議論の特徴は、論介をめぐる逸話に歴史的な事実と異なる要素が多数ある可能性を指摘している点にある。実際、国家の英雄である論介には不確かなことがあまりにも多い。その一つは、倭将と同じように、論介の殉節した年齢がはっきりしていない点である。

一般的には花盛りの十八歳または二十歳であったといわれているが、申晃（一六一三―一六五三）の記した『再造藩邦志』に、徐礼元と金千鑑の間の内部対立に対して「前日、金牧使がこの城にいらつした時は、上下の隔たりなく和合し協力したので、最後まで守城ができたのです。ところが今の状態を見ると、前日とはまっ

たく異なるので、我々は生死を計ることができません」と強く抗弁する年取った妓生が登場する。一九二五年に姜敷錫が編纂した『大東奇聞』では、この年取った妓生が論介と想定されている。^⑥もちろん、ここでも論介は、晋州城陥落の際に敵将とともに投身して死ぬことになる。このように、若い女性であったり年取った女性であったりと、記録や伝承の中に登場する論介の年齢は曖昧なのである。

殉節した日についても二つの意見に分かれている。日本軍が戦勝の宴を開いたのは旧暦七月七日だったので、その日に殉節したというものもあれば、晋州城陥落の日に殉節したので六月二十九日だと主張する者もいる。死亡日ははっきりしない場合、九月九日の重陽節に祭祀を行う伝統があるので、晋州民俗芸術保存会は、一九九二年から論介のための祭儀である義岩別祭を旧暦九月九日に行っている。^⑧一八六八年に晋州牧使の鄭顯奭が義岩別祭を六月の吉日を選んだ。一八六八年に晋州牧使の鄭顯奭が義岩別祭を六月の吉日を選んだ。七月七日になっていることも、同様の理由からであった。このように、実は論介の殉節日も正確ではないのである。

さらに、彼女の名前についても、朱論介、宋論介、蘆雲介、魯隱介など複数あり、正確な姓名は判明していない。さらには、近年、論介は朝鮮風の名前ではなく日本風の名前だという説まで出されている。たとえば、金文吉によれば、「介」は日本の古語で「大きい」「優れる」「特殊だ」という意味を持っている。そして名前も名字も

ない場合、背の高い人は「六介」、肥満であれば「肥介」、目の大きい人だったら「目介」、口が達者だったら「牟介」あるいは「論介」など、身体的特徴を表す名を付けたという。^⑨だとすると、論介は論理的で話上手な人を指し、日本人によって付けられたことになる。

もっとも、現在、このような見解に賛同する人はほとんどいない。なぜなら、彼の論理に従えば、日本の庶民にも同じ名前が数多く見られるはずであるが、六助（六介）くらいしか見当たらないからである。論介という名前が皆無であるとはいえないが、あったとしてもその場合ほとんどが男性であろう。「すけ（介、助）」を付ける場合、日本では女性ではなく男性であるのが一般的である。

それに比べて、韓国では「介」を使う名前はいくらかでも見つかる。鄭棟柱は、一六一七年の『東国新統参綱行実図』に「論介は礪山郡人で良人曹忠良の女である（論介礪山郡人良人曹忠良之女）」という一文が存在することを指摘した上で、それには晋州の論介と同じ名前の人物が登場しており、また朝鮮時代全般にわたり、徳介、玉介、仁介など論介と似た名前がよく出てくると述べている。^⑩したがって、名前に「介」が付いているからといって、ただちにそれが日本人によって付けられたと見るのは誤りであり、この説は十分な検証がなされていない民間伝承のたぐいに近い。

このような解釈ならば韓国にもある。すなわち、甲戌年、甲戌月、甲戌日、甲戌時に生まれた論介は四甲戌つまり四頭の犬（戌）が入

る運命を持つ、あるいは親は息子を望んだが女の子が生れたので失望して「犬を生んだ」という意味から「論介（ノンゲ）」と名付けた、という説である。「ゲ」は犬の「ゲ」と同じ発音である。要するに「ナウンゲ（生んだ犬）」が「ノウンゲ」「ノオンゲ」に変わり、それが「ノンゲ（論介）」になったのである。その一方で、病氣にかからず丈夫に育つことを願って「犬」を意味する「介」を名に付けたという説もある^①。このように、名前についても様々な民間伝承があり、彼女の本名もいまだに確定されていないのである。

それだけではない。彼女の故郷も不確かである。長水をはじめ晋州、順昌、任実など、様々な説が出ているが、現在は長水の溪内面大谷里朱村が定説となりつつある。しかしこれも最近のことである。一八七二年の『長水県誌』では、論介の故郷は「任県内面楓川」になっている。これを信じた朝鮮後期の文人である黄玼（一八五五～一九一〇）は、晋州の「義妓祠」を訪問し、楓川渡口水猶香濯我鬚眉拜義娘^②で始まる漢詩「義妓祠感吟」を作った。その後、一九二五年発刊の『長水誌』と一九五三年の『朝鮮湖南誌』ではそのまま「任県内楓川」になっていたが、一九八二年の鄭飛石作「晋州妓論介」では楓川を「溪内面月岡里楓川」としており、一九六二年の朴鍾和作「論介と桂月香」では「長水面煙沙里」となっている。

その中でも、大谷里の朱村が有力な候補地として挙げられるよう

になった。一九五四年の「義娘論介の碑」の背面にある「論介の事縁」では「内溪面大谷朱村里」になっている。また一九六〇年の「義岩朱論介娘生長地事跡不忘碑」には「溪内面大谷里朱村」、一九七五年の『碧溪勝覧』では「溪内面大谷里朱村」になっている。一九七九年の田炳淳の小説『論介』では「溪内面大谷里闕村」となっていたが、朱村には勝てなかった。一九八〇年代に入り全羅北道と長水郡が「溪内面大谷里朱村」を論介の故郷として公式に確定し、そこを聖域化することにより、一応故郷に関する論争は一段落した。

また、彼女の出身・身分も統一見解がなかった。定説では彼女は官妓であるが、近年、妓生ではなく妓生に変装した両班出身の女性だという説が出されている。前者の説にも、晋州の妓生であるという説をはじめ順昌の妓生、同福の官妓など様々な説がある。一方、後者の説にも、両班家の新安朱氏出身の女性だという説から愛妾説まである。愛妾説について見ると、相手の男性として挙げられるのは、崔慶会（一五三二～一五九三）、金千鎰（一五三七～一五九三）の息子（金象乾）や黄進（一五五〇～一五九三）、徐礼元（？～一五九三）など、実に多様である。また一九五四年の朴鍾和の小説『壬辰倭乱』では、晋州牧使金時敏に片想いし、金時敏の死後は黄進に恋する妓生として描かれている。このように論介がどのような女性だったのか明らかになっていない。

また論介の家族も確かではなかった。一七二二年、兵馬節度使の崔鎮漢（一六五二―一七四〇）は備辺司に対し、論介を褒賞するよう建議した。すると備辺司から次のような肯定的な返事が下された。

戦乱の中で身を投じ盜賊とともに死んだ彼女の話が事実であれば、褒賞に値する。しかし事実だと証明する文献がないので、美しさを偲び、手厚い賞を与えることを簡単に決定できない。もし根拠となる記録があれば、右兵宮で議論し備辺司に送った後に施行するのが当然である。⁽⁷²⁾

ここから確認できるように、備辺司は証拠さえあれば褒賞を与えろという方針を示した。すなわち証拠を出せということであった。これに対して晋州士民は岩に論介の話を刻み、それを証拠として出した。つまり創作した証拠を提出したのであった。そこまでされると、朝廷もやむをえず、その翌年の一七二二年（景宗二）に論介の子孫を探し賦役を免除すると決めた。また、国の特別な恩田を与えるという備辺司の通知文を慶尚右兵使が管轄する村ごとに送り、論介の子孫を探したが結局見つからなかった。すなわち、論介の実在も定かではなかったのである。

それにもかかわらず、現在は崔慶会の側室説が定説となりつつある。だが、そこにも問題がなくはない。崔慶会の側室に関する記録

が初めて登場したのは、一七五〇年頃に議政府左參贊の權適（一六七五―一七五五）が作成した「慶尚右兵使贈左贊崔公諡狀」においてであった。これには、「彼の賤妾も公が死んだ日に綺麗に着物を身に着け化粧して南江の岩で敵将を誘惑し、敵将に抱きついて投身自殺した」とある。⁽⁷³⁾つまり崔慶会の「賤妾」といつているだけで、論介とは一切いつていない。ところが一八〇〇年頃に湖南の文士らが編纂した『湖南節義録』には、「妓女論介は長水人で、公のお気に入りだった。公とともに晋州城に入り、城が落ちると念入りに身繕いをして敵将二人を誘引し、南江の切り立った岩の上で踊り、両腕で二人の敵将を抱いたまま川に落ちて死んだ。後世の人々はその岩に義岩と刻んで石碑を建てた」と記されている。⁽⁷⁴⁾ここで、初めて論介が崔慶会の妾として登場するのである。これを根拠に、多くの人々は崔慶会が長水県監として赴任していた際に論介と特別な縁を結んだと見ている。鄭飛石は一五八六年に崔慶会が当時十八才の論介を側室にしたと主張するのに対して、裴浩吉は一五八九年に崔慶会が十七才の論介を側室にしたと述べている。⁽⁷⁵⁾

しかしそれはともに事実ではない。崔慶会がいつ長水県監になったのかについて正確な記録はないが、一五七九年三月に長水県監から茂長県監に異動したことは事実である。このことを照らし合わせて見た場合、長水県監の在任中に論介との縁が結ばれたとするならば、一五九三年時点で論介は少なくとも三十代半ばになっていたこ

となる。そうではなく、一五九三年に花盛りの十八歳で殉国したとするならば、崔慶会の側室になった時の論介の年齢は満三歳という矛盾が発生してしまう。⁷⁶このように、論介が崔慶会の側室であったというのは歴史的事実として受け入れ難い。それにもかかわらず、日本人の上塚と海州崔氏門中の人々は、これを歴史的な事実として信じ、直接行動で示した。しかし、これまで見てきたように、彼らの一連の行動を裏付けるはずの「事実」とは、歴史と伝承が混同したものであったのである。

五 民俗学から見た論介と六助

日本人の上塚は善意から論介と六助に同情し、彼らの墓を造成したのだろう。だが、彼の行動によって韓日間に亀裂が生じ、宝寿院を廢墟同然の姿に追いやることになった。その根底には、次のような両国の靈魂觀の相違があった。

一つ目は、怨親平等思想に基づいた、敵味方とともに供養する民俗文化の有無である。これは元々仏教用語で敵も味方も同じように平等に取り扱うことを意味し、特に日本では彼我を区別せず、すべての人を極楽往生に導くために供養塔を建て慰靈祭を行う伝統が生まれた。たとえば南北朝時代の足利尊氏は「元弘の役」の後、敵・味方の戦死者を供養するために全国各地に安国寺と利生塔を建立し

ている。また壬辰倭乱後の一五九九年には、島津義弘（一五三五―一六一九）と忠恒（一五七六―一六三八）の父子が、敵・味方関係なく朝鮮で戦死した靈魂のため高野山に供養塔を建てている。⁷⁷言い換えれば、日本には敵と一緒に葬るという供養の伝統が昔からあったのである。上塚の随筆には、六助が「戦死した両国の兵士たちの冥福を祈った」場面が描写されており、上塚自身も日韓軍官民合同慰靈祭を行っている。このように、彼の一連の行動の根底に彼我を区別しない思想的な要素があることは間違いない。論介と六助の墓碑造成と供養もまた、日本の伝統的な怨親平等思想から生じたものといえる。上塚は、この世では敵として出会ったが、死後にはすべて同等に極楽往生することを心から願ったのかもしれない。

ところが、このような発想は韓国では見られない。生前に敵として命賭けで激しく戦った者と同じ場所に墓を造る、などということとは不可能である。日本人は、死後永い歳月を経ると、その靈魂は個性を失い、巨大な一つの靈魂に統合されると考えるのかもしれないが、韓国には、いくら時間が経っても靈魂の個性は失われず、そのまま存在するという靈魂觀がある。特に怨靈の場合はそのような傾向が強くなる。したがって、韓国には怨親平等思想がないといっても過言ではない。これがよく表われているのが、尹成孝の「論介を辱めるな」という檄文である。関連する部分を見ることにしよう。

大統領のお祖母様をそうされたら、万が一の話ですが、もし一介の日本人が日本で大統領や外交通商部長官、晋州市長、長水郡守らの祖母の祠堂を造り祀っているとされたらどうなさいですか。また、万が一の話ですが、智異山のある谷に李舜臣將軍と豊臣秀吉の影幀を並べて掛けた祠を造ったとしたら、我々は韓日親善だと笑って見過ごせるでしょうか。また日本に柳寛順烈士の仮廟を造り石碑を建て、その前で祈ると子どもが授かるという信仰が作られたとしたら、我が国民はどうしますか。答えは簡単です。「ノー」です。「絶対ノー」です。もう少し詳しく申しますと、「なにを言っているのだ。そんなことがどうして可能なのか、もしそんなことがあったら黙っていないぞ」と、気の短い人たちは激憤して、それに火を付けるかもしれません。また事情がわからない人たちは「どこでそのようなことがあるのですか？」と反問すると思います。⁽⁷⁸⁾

右からわかるように、尹成孝は日本人によって論介が日本で六助とともに祀られていることに憤怒を感じている。それは、李舜臣將軍と豊臣秀吉と一緒にすることであり、柳寛順烈士を日本人が祀るのと同じことだと主張している。彼の論理では、怨親平等に基づいて敵と味方の靈魂と一緒に祀ることは「絶対不可能」なのである。したがって、論介と六助の墓碑を並べてともに祀ること自体が許さ

れる行為ではない。このような行為に対しては、鄭棟柱の表現を借りると、「妾室のように見えて、恥辱を感じる」のである。⁽⁸⁰⁾ 敵・味方を同じように扱った場合、死霊の恨みが増幅されるばかりでなく、子孫も許せないほどの屈辱感を抱くというのが、韓国人の一般的な感覚なのである。このような靈魂觀の違いから、論介の墓碑をめぐる韓日両国が衝突するのは、当然の帰結だといえる。

二つ目は分墓の可否である。日本では分墓はいくらでも可能である。墓地も屍体を埋めている場合もあれば、お参り専用のものもある。また高野山の奥之院のように、骨の一部（または無し）を納めた墓を造る例もよく見かける。少し極端な表現かもしれないが、日本における墓碑は記念碑に近い。六助の墓も宝寿院以外に二カ所もある。一つは宝寿院に近い六助の故郷、大分県中津市山国町毛谷村にあり、もう一つは六助の首を埋めた名護屋麥原の喜田神社にある。上塚が自分の土地に造った六助と論介の墓は、彼にとって靈魂の眠る場所ではなく単なる記念碑・供養塔であった可能性が高い。

しかし、こうした思考も韓国にはない。できる限り一つ残らずすべての骨を一カ所に集めて安葬することを理想とする。なぜなら、韓国人は日本人と違い、骨（肉体）を納めた墓には死者の魂が入っていると見るからであり、分散して墓を造ることは不可能なのである。韓国人の精神世界で核となっている風水地理説は、墓は靈魂が宿るところだという認識がなくては成り立たない。したがって、故

人の墓を二カ所以上造ることはありえない。論介の墓が慶南咸陽郡西上面芳池里にある限り、ほかの場所に墓を造ることはできない。長水や晋州など他の地方自治団体も論介の遺跡地を沢山作って観光資源としたが、墓だけは造らない。その理由はそこにある。

こうした霊魂観を考慮せず、上塚は骨の代わりに義岩付近で拾った石を納めて論介の墓を日本に建立したのである。これを見た韓国人は当然論介の霊魂が奪われたと認識し、「死後結婚」「売られた論介の霊魂」「論介霊魂の返還」などと表現したのである。全南光州和順海州崔氏宗会代表の崔弘鎮氏は「論介が日本の山中で寂しく様々な雑神に囲まれて苦しんでいることを考えると、胸が引き裂かれるようだ⁸²⁾」と話している。このように、墓には霊魂も伴うという認識がある。だからこそ彼らは上塚に対して霊魂の返還を要求し、韓国政府にも協力を強く求めたのである。そして、それは奇想天外な霊魂の国際紛争に発展したのである。

第三に、韓国には、死者の祭祀権は直系の子孫が持つという大原則がある。すなわち、霊魂の所有権は子孫が持つということである。たとえ国のために死んだ人間であっても遺族は国立墓地への安置を拒否することもできる。この点が靖国神社の霊魂観とは異なる。論介が崔慶会の側室であれば、当然その霊魂の所有権は海州崔氏の門中にある。論介の実家である新安の朱氏よりも崔氏の門中が優先される。彼らが宝寿院を訪ね強く抗議したのも、このような認識から

であった。何の関係もない日本人の上塚が論介を祀ることは許せなかったのである。

四つ目は、死後結婚に対する認識が日本人には稀薄であるのに対し、韓国人はそれを強く認識しているという点である。いくら上塚が善意から論介の墓碑を造ったとしても、それを見た韓国人は間違いなく誤解する。六助の墓碑と同じ場所に、しかも並んで置かれているからである。これは韓国では夫婦の墓を意味するので、韓国側はこれを恥辱的な行為だと受けとめたのである。さらに上塚は、本堂に六助の家族の位牌とともに論介の影幀も掲げた。韓国においてこれは死後結婚以外のなものでもない。実際に、そのような認識があった。たとえば海州崔氏光州全南宗会が晋州市と晋州市民に送った書簡には、次のような文章が記されている。

日本の上塚という怪しい糞坊主が晋州にやってきて、晋州の護国寺の僧から案内を受け義妓祠の論介婦人の影幀を模写していった。そして南江で招魂式まで行い、論介婦人が命をなげうって殺した敵将に対する怨恨を解くという荒唐無稽な詐欺劇を演じ、招魂式を通じて事実上の夫婦のようにしてしまった⁸³⁾。

このように、論介と六助を一緒に祀るという上塚の行為を、彼らは死後結婚として捉えている。研究者の金守業もまた、当初の計画

で上塚は六助と論介を夫婦にするつもりであったが、それは韓国人を怒らせる行為だと気付き、彼らと同じ場所に祀って供養する計画に変えた、と解釈している⁸³⁾。また論介について長期にわたり取材し報道してきた言論人の尹成孝は、上塚の行為は論介を六助の「愛妾」にすることだと、檄文を書いた⁸⁴⁾。このように、論介と六助の合同慰霊祭を行うことは、韓国人にとつては日本軍と戦った革命の女性、護国先烈の象徴である論介に屈辱を与えるのと同じだと捉えたのである。

実際のところ、死後結婚は韓国だけの民俗風習ではない。遠くは北アフリカ、近くは中国、台湾、アジアの漢族社会などでよく見られる、比較的普遍的な民俗文化である。一方、死後結婚に関しては、日本は特殊な文化圏に属している。というのは、死後結婚の事例は沖縄と東北地域の一部に限って見られるだけで、本土にはほとんど見られない慣習だからである。特に宝寿院を建立した上塚が住んでいる九州地域にはまったくないといっても過言ではない。したがって、彼の目的が論介と六助を死後結婚させることにあったという韓国人の解釈には説得力があるとはいえない。

実際、上塚は死後結婚させるつもりだったとは一言もいっていない。死後結婚説は晋州市内で花屋を経営する姜徳寿氏の証言が発端となつて広まった。彼の話によると、当時、晋州を初めて訪れた上塚から花の注文を受けて、それを届けるために彼の滞在する旅館に

行くと、義岩までの案内を頼まれたそうである。案内すると、不思議な行動を取り理解できない念仏も唱えるので、日本語のできるお婆さんと呼んで、その内容を聞いてみると、死後結婚させるために二人の魂を南江ですくい上げているのだと答えたというのである⁸⁵⁾。しかし、上塚が論介と六助の靈魂を南江から迎える儀式を行ったのは事実として認められるが、ただちにその行為が二人の靈魂を死後結婚させるためだとはいえない。それは通訳者の一方的な解釈かもしれない。上塚に死後結婚をさせる意図があつた可能性も否定できないが、その場合、死後結婚に関する知識を韓国で得てから儀式を執り行った可能性が高い。繰り返しになるが、彼の住む九州には基本的に死後結婚の民俗風習がないからである。

いずれにせよ、宝寿院の建立はともかく、慰霊の方法には様々な問題があつた。六助の妻の墓碑を造らず、六助の墓碑の隣に論介の墓を造った点は言うまでもなく、寺の本堂に六助の家族の位牌とともに論介の影幀を掲げて祀つたのも問題であつた。それを見た日本人も、論介が六助の家族の一員だと誤認するだろうし、まして韓国人ならば死後結婚を連想し、しかも正妻ではなく側室（愛妾）だと誤解を招くことは避けられないだろう。

さらに彼の行為は、論介が属する門中に一切相談することなく一方的になされた。海州崔氏の門中では、論介を姦生ではなく、崔慶会の側室で崔將軍の後を追ひ殉国した自分たちの祖先として見てい

る。その論介を先祖から一人だけ引き離し、しかも敵将とともに祀るなどということは韓国人にとって許せるはずがない。上塚のそもその動機が葛藤と対立を乗り越えて和解と平和に向かうことにあったとしても、それは出発点から紛争の種を持っていた。案の定、六助と論介を祀った宝寿院は、今日、韓日のいずれからも参拝者のほとんどない廃寺同然の状態に陥ったのである。

六 まとめ

一七八〇年頃に晋州を尋ねた朝鮮後期の南人実学者、丁若鏞（二七六二―一八三六）は論介に対して「娼妓族属は幼い時から奔放・淫蕩で、男を次々と乗り換え、その性格は水の流れるようにして留まらず、すべての男性をその夫と思う。夫婦関係はもちろん、それ以上の君臣関係が彼女らにどうして理解できるだろうか。ゆえに、昔から戦争中に敵に略奪される美女は多かったが、節義のために死んだという話はこれまで聞いたことがなかった。……そのかわい身で勇敢に敵将を殺し、身を投じて国の恩に報いることは、君臣の義理が天地の間に燦爛たる光りを発し、……いかにも痛快なことではないか」と評している。つまり、論介の偉大さは純潔を守れない妓生という身分にあったからこそ増すのである。

国家の恩恵にあずかった階層が国のために忠を尽くすのはきわめ

て当然のことである。ところが、当時は、人民を捨てて逃げる国王および大臣、さらに国を裏切って日本軍に協力する両班や良人が沢山いたのかもしれない。さらに論介が死んだ晋州城の状況について、丁若鏞は隣近地域から救援兵が送られなかったこと、朝廷では功労を嫉妬して敗北を喜ぶほどだったと先の一文の前に書き綴っている。それだけではなかった。申晷は『再造藩邦誌』で、徐礼元と金千鑑は意見が合わず、上下の命令系統が確立されていなかったと記述している。すなわち、晋州城の陥落は内部分裂からもたらされたと仄めかしている。このように、日本軍に対峙し混乱していた時に、身分の低い妓生の論介が殉節したのである。『壬辰録』は「敵将が死んだので、敵兵は城を捨てて退却した。これにより晋州は回復した」と誇張表現も憚らず記している。要するに、彼女の死は空理空論と論功行賞でいざこざと対立だけを繰り返している両班に対する厳しい警告であり、痛烈な批判でもあった。

妓生とは、丁若鏞が表現したように、貞節とは無縁で敵・味方の区別なくすべての男性を夫にする賤しい職業の女性であると見なされていた。このような女性であっても勇気をもって自分の命を捨て国への忠烈を全うした、という点が論介をめぐる話の大きな特徴である。朝鮮時代の女性にとって、忠とは、夫に対する貞節を守ることを通じて間接的に実現するものであった。⁸⁷⁾そのため、女性は夫の後を追って死ぬか、あるいは貞節を守るために抵抗し最後は自決す

るのがほとんどであった。それに比べ、論介の特異性は直接敵將を殺したことにある。これは妓生だから可能であった。だからこそ論介は死んだ後、家門のために犠牲になった「貞烈」のレベルを超えて、国家のために身を捧げた「忠烈」のシンボルになることができたのである。

論介の話をも最初に記録した柳夢寅（一五五九―一六二三）もこの点を高く評価し、「大抵官妓は淫乱なる娼女の体を持つので、貞淑とは言えない。それでも死ねば故郷に帰ることができると思って敵に体を許さなかった。彼女らもまた「国王」の恩を受けた人間として決して国を捨てて敵に追従することはなかった。それはまさに忠誠心そのものであった」と述べている。すなわち、官妓である論介は、一人の男ではなく一つの国家に対して貞淑であったのである。この点を晋州の地元の人々は強調したかったのかもしれない。この点を見逃さなかった近代の詩人、卞榮魯（一八九八―一九六一）が、一九二二年、論介の死について驚くべき憤怒と情熱で「宗教よりも深く、愛よりも強く、隠元豆の花よりも青く、楊貴妃の花よりも赤い」と歌ったのも、そのためであった。

晋州妓生にとって論介は一つの誇りであった。その伝統は朝鮮末期の晋州妓生である山紅にもそのまま受け継がれている。山紅は、論介に対して「千秋汾晋義雙廟又高楼 羞生無事日 茄鼓汗漫遊」という漢詩を創った。親日派の李址鎔（一八七〇―一九二八）が大金

でもって山紅を愛妾にしようとした際、彼女は「世間では大監を五賊の頭だといいます。妾は賤しい娼妓で自ら人のなかに入ります。とはいえ、どうして逆賊の妾になれましようか」と固く断つたため酷く暴力に振るわれたと、黄玪（二六二三―一六五二）は『梅泉野録』に記している。このように、日本に祖国を売り渡すのを容認できない晋州妓生という伝統は、論介の正義の死と通じるところがある。山紅はいわば第二の論介だったのである。

晋州妓女らは論介が死んだ日に合わせて毎年、論介祠に集まり三日間の祭祀を行っていた。一八七二年頃に鄭顯奭（一八六七―一八七〇）が編纂した『教坊歌謠』によると、三日間で三百余人の妓女が集まり歌舞を披露しながら儀礼を行ったようである。また祭官もすべて妓生が引き受けたという。この期間は、晋州だけでなく隣近地域からも大勢の人々がこれを見るために寄り集まった。論介祠で祭祀が行われる三日間は、老若男女、身分の上下を問わず皆が一緒に楽しむ祝祭日であった。その一方で、妓女たちが論介の末裔として、そして誇りを持った社会の構成員として認められる機会でもあった。その意味で、論介の死は身分の階層を乗り越える汎国家的な意味を持つ。

近年、論介を妓生ではなく両班に縁のある女性だとする解釈が登場した。家が貧しかったため両班の側室に入り、夫が倭軍の手によって戦死すると、恨みを晴らすために妓生に変装して敵將を誘惑

し溺死させた、という話がそれに当たり、この話に基づいて復元された「遺跡」も多い。このように、論介はもはや晋州の官妓ではなく、義兵将崔慶会の側室として生まれ変わっている。すなわち、忠烈（国家）の象徴が貞烈（家門）の象徴に変わったのである。

事実、論介は両班家の出身だったのかもしれない。しかし、これらの一連の解釈が見逃している重要な事実がある。それは、論介を汎民族的な英雄ではなく、門中レベルの英雄に矮小化することであり、また妓生という賤民が受け継いで大事にしてきた宝物（英雄）を両班という名の下に軽はずみに奪ってしまう、ということである。つまり、論介は両班ではなく妓生だったからこそ偉大だったのであり、柳夢仁と丁若鏞が強調していたのも、まさにその点であった。

晋州の人は論介を愛国的な英雄としてだけでなく、もう一歩進んで、民間信仰の神として崇めた。『教坊歌謠』に、晋州牧使として赴任した鄭顯奭が妓生に歌舞を披露させ祭官として義岩別祭を行わせたところ、その年から南江の河岸で洗濯する女性が溺死する事故がなくなったという記事がある。⁹⁰ このように論介はいつの間にか水難除けの神として祀られるようになった。そして論介に献饌として捧げる栗、ナツメ、干し柿を東に向かって食べれば男の子を授かるという俗信まで生まれた。それゆえ、男の子を望む婦人らは、この日を指折り数えて待ったという。⁹¹ 福岡県の宝寿院で論介が次第に「子孫繁昌」「夫婦円満」の神となったのは、もしかするとこのよう

な、韓国で論介に与えられた神としての性格に起因するのかもしれない。論介は一介の妓女ではなく、晋州の全地域民に尊敬される愛国的英雄であると同時に民間信仰における神的な存在だったのである。

韓国の国民的な英雄である論介の靈魂を祀った宝寿院の建立と廃亡は、韓日間の独特な靈魂觀の対立の象徴でもあった。和解と容赦、平和という純粋な理念で行われたとしても、宝寿院による祭祀は当初から様々な問題点を抱えていた。伝説として伝わっている論介の事件を歴史的事実として理解し、命を失った論介と六助に対する同情から彼らの墓碑を建立し、韓日軍官民合同慰靈祭を行った。日本人は、これを怨親平等思想に基づいた博愛精神の発露と見るかもしれない。しかし韓国人は怨親平等思想とはまったく異なる観点で捉える。韓国人にとって、それは敵と一緒に葬られることであり、靈魂の分離であり、祭祀権と所有権の侵害なのである。また、それだけではなく、夫がいる婦人を強制的に連行し無理やり敵将と死後結婚させることであり、日本人には想像できないほど民族的な屈辱を感じる行為なのである。

最終的に、宝寿院での祭祀は外交問題にまで発展し、韓国政府が上塚に協力を求めた結果、上塚の私有財産であった論介の影幀と石碑は韓国側に返され、合同慰靈祭も中止されることになった。また、一時、日本において論介が夫婦円満と子孫繁昌の神として知られる

ようになっていたが、それも途絶えてしまった。いわば、韓国人の子孫らによって日本の神になるのを拒まれたのである。

また、視線を転じて、六助にも注目する必要がある。六助は英彦山一帯では伝説的な人物である。英彦山宝物館には六助が使ったという巨大な鉄砲や鉄棒が展示されている。⁹²そして今も英彦山一帯には六助に関する伝説が数多く伝わっている。また歌舞伎作品を通じて全国的に知られている人物でもある。最近、山国町では彼の一生を映像化し、大々的に宣伝しようとい力を注いでいる。また地域住民が「六助旅館」「六助工房」「六助焼き物」のように店の名前に六助を使うことも多く、また「六助饅頭」「六助焼酒」といった商品も販売している。さらに、かつて六助と名乗る地元政治家もいた。それだけ六助は地域を代表する英雄であった。

はたして、この六助は論介によって溺死させられた人物であろうか。以上、見てきたように、実のところ、この点はこれまで検証されたことがなかった。ある者は論介が殺した敵将は六助だと主張し、その根拠を鷲山・李殷相（一九〇三―一九八二）が日本留学した際に見た日本の戦史（もしくは浄瑠璃の『大攻艶書合』）に求める。またある人は、論介と六助の物語は稗史の領域から生まれ時代の流れによって発展したものであり、二人とも実在の人物とは考えられないという。それゆえ、六助が論介によって殺された人物として断定するのには問題がある。もし六助の死が論介と関係がなければ、六

助はあまりにも可哀想な存在である。これに対しても慎重を期し、より深く緻密な検証が行われるべきである。宝寿院の荒廃が我々に教えてくれる教訓はここにもう一つあるのではないだろうか。

註

- (1) 韓国では豊臣秀吉が引き起こした「文祿の役」と「慶長の役」を総称して「壬辰倭乱」と呼んでいる。
- (2) 하강진「晋州 矗石樓 題詠詩의 題材的 性格」『韓国文学論叢』五十（韓国文学会、二〇〇八年）二〇八頁。
- (3) 金美淑「朝鮮後期晋州 劍舞研究」『韓国舞踊研究』二十四―一（韓国舞踊研究会、二〇〇六年）一〇〇―一〇一頁。
- (4) 論介の姓は一般的に朱とされている。
- (5) 朝鮮中期の義兵將。論介の夫としても知られている。一五九三年六月晋州城で活躍したが、日本軍により城が陥落すると南江に投身自殺した。
- (6) 『東亞日報』一九八九年二月二十日付。
- (7) 李命吉は元晋州文化院長を歴任した人物であった。これはおそらく建立した人と個人的に親しかったからのようである。
- (8) 『朝日新聞』一九九四年十月二十三日夕刊「博多湾物語 第五部 対岸から」。
- (9) 田畑博子「彦山権現誓助剣論——毛谷村六助と論介」『国文学解釈と鑑賞』六十一―五（至文堂、一九九六年）一七二頁。
- (10) 岩谷めぐみ「論介における説話の変遷——韓国の地域感情及び日韓の社会情勢からの考察」『立教大学日本学研究所年報』四（立教大学日本学研究所、二〇〇五年）九三頁。
- (11) 金茂祚「通過儀礼를 通하여 본 論介의 生涯」『論介事跡研究』（慶星大郷

- 土文化研究所、一九九六年）四〇頁。
- (12) 鄭棟柱「晋州城 戦闘外 論介」『南冥学 研究』七（慶尚大南冥学研究所、一九九七年）八一頁。
- (13) 鄭飛石「美人別曲五卷（論介編）」（高麗苑、一九八九年）三四三頁。
- (14) 芦馬豊雲編著「郷土田川「史録」毛谷村六助「貴田孫兵衛」伝」（吟詠道 無相豊雲流絵本部、一九九一年）一三三五頁。
- (15) 『晋州新聞』一九九九年五月十日付。
- (16) 上塚博久「毛谷村六助の墓碑建立趣意書」（芦馬豊雲編著、前掲書、二一九～二三三頁）。
- (17) 芦馬豊雲編著、前掲書、二二一～二二三頁。
- (18) 同前、二二六頁。
- (19) 上塚博久「私と桔梗」（芦馬豊雲編著、前掲書）二二七頁。
- (20) 김규원「日本을 떠도는 論介의 魂靈」『한겨레』21（一九九八年十二月十七日）五六頁。
- (21) 鄭飛石、前掲書、三四三頁。
- (22) 『晋州新聞』一九九七年三月十七日付。
- (23) 김규원、前掲書、五六頁。
- (24) 鄭棟柱「反外勢鬭争의 表象 論介」『WIN』二四一（一九九七年五月二四七頁）。
- (25) 박노규「論介와 倭將의 靈魂結婚（또는 詐欺結婚）」『月刊 朝鮮』八（朝鮮日報社、一九九九年）二五五頁。
- (26) 정순태「論介」『WIN』二四一（一九九七年五月）二六六頁。
- (27) 『晋州新聞』一九九八年四月十三日付。
- (28) 정순태、前掲書、二六六頁。
- (29) 李南教「韓国の列女の墓碑を建てた日本人、無窮花と桜」（福岡韓国教育院、一九八一年、一九〇頁）。
- (30) 金茂祚、前掲書、八六頁。
- (31) 鄭棟柱「晋州城 戦闘外 論介」、八一頁。
- (32) 김규원、前掲書、五七頁。
- (33) 『晋州新聞』一九九八年八月二十四日付。
- (34) 강병주「日本에 論介의 墓가 있다」『晋州文化』二十二（晋州文化院、一九九七年）九九頁。
- (35) 김규원、前掲書、五七頁。
- (36) 尹成孝「論介를 辱되게 하지 말라」『人物과 思想』五（人物과 思想社、一九九九年）一六二～一七六頁。
- (37) 一九一六年に朴重彬が創始した韓国仏教系の新宗教。全北益山にある中央総部が教団を運営。
- (38) 金守業「論介」（知識産業社、二〇〇一年）三六～三七頁。
- (39) 同前、三六～三七頁。
- (40) 宣祖二十六年六月一日（甲申）條。
- (41) 鄭拭「蠶石樓重修記」（『明庵集』四）では「惜乎、奥以壬辰兵燹之間、幸免於凶炬蕩殘之患」となっている（하강진「晋州蠶石樓 題詠詩의 題材의 性格」『韓國文学論叢』五十（韓國文学会、二〇〇八年、一九一頁）。
- (42) 宣祖二十六年七月十六日（戊辰）條。
- (43) 金子尚一「ノンケ悲話における毛谷村六助」『国文学解釈と鑑賞』五十九一（至文堂、一九九四年）一八二～一八三頁。
- (44) 田畑博子、前掲書、一七二～一七三頁。
- (45) 姜大敏「論介의 生涯와 歴史的 意味」『論介事跡研究』（慶星大郷土文化研究所、一九九六年）四〇頁。
- (46) 崔官「日本近世文学에 있어서 壬辰倭乱과 毛谷村六助」『日本語文学』三（日本語文学会、一九九七年）二七五～二七七頁。
- (47) 金京欄「大功艶書合考——貴田孫兵衛（毛谷村六助）と朝鮮の女性をめぐって」『日本語文学』二十六（日本語文学会、二〇〇四年）一七二頁。
- (48) 金守業、前掲書、一〇八～一〇九頁。

- (49) 박기용 「論介說話의 叙事 展開 樣相과 意味」 『우리말글』 三十二 (우리말글学会, 二〇〇四年) 一七五—一七六頁。
- (50) 武内確齋『絵本太閤記』下 (有朋堂, 一九一七年) 一七〇頁。
- (51) 中野嘉太郎『加藤清正傳』 (青潮社, 一九七九年) 一一三頁。
- (52) 下毛郡教育会『下毛郡史』 (下毛郡, 一九七二年) 八二〇頁。
- (53) 田畑博子, 前掲書, 一七〇頁。
- (54) この文書は六助の古里である毛谷村の喜登家に伝わるものである。その内容を紹介すると次の通り。「六助ト申ハ佐竹勘兵衛之子。妻ハ今井村町人園部彌衛門ト申者ノ娘也。佐竹ハ元来浪人之身柄。実名ヲ隠シ、母方之苗字ヲ取り園部六助ト名乗り。〔中略〕六助長成二七才之頃、文禄四年乙未太閤朝鮮征伐之御供仕。古今無雙の勇士の末、□□。終に打勝太閤御凱陳之御供申。当所へ帰り、六二才にて病死す」。
- (55) Vladimir Tikhonov (박노자) 「義妓 論介 伝承——戦争、道徳、女性」 『洌上古典研究』 二十五 (洌上古典研究会, 二〇〇七年) 二四四頁。
- (56) 박기용, 前掲書, 二三頁。
- (57) 川村湊『妓生——もの言う花』の文化誌 (作品社, 二〇〇一年) 七九—八〇頁。
- (58) 岩谷めぐみ, 前掲書, 一〇八頁。
- (59) 유승우 「晋州城의 義妓 論介考」 『韓國史學論叢』 (崔永禧先生華甲記念論叢刊行委員会, 一九八七年) 九〇七頁。
- (60) 岩谷めぐみ, 前掲書, 九九—一〇〇頁。
- (61) 川村湊, 前掲書, 八二—八三頁。
- (62) 金京欄 「韓國の〈論介〉説話と浄琉璃〈大功艶書〉及び改作について」 『演劇研究センター紀要』 五 (早稲田大学二十世紀COEプログラム, 二〇〇五年) 四〇頁。
- (63) 金京欄, 前掲書, 二〇〇五年, 四一頁。
- (64) 岩谷めぐみ 「郷里における毛谷村六助と論介——福岡県郷土紙〈かみつゝ〉をめぐる」 『立教大学日本文学』 一〇九 (立教大学, 二〇一三年) 一四六頁。
- (65) 鄭出憲 「壬辰倭亂의 英雄을 記憶하는 두 개의 樣式」 『漢文學報』 二十一 (우리漢文學會, 二〇〇九年) 三二八—三二九頁。
- (66) 同前, 三二二頁。
- (67) 鄭智泳 「論介와 桂月香의 죽음을 다시 記憶하기——朝鮮時代 義妓의 誕生과 排除된 記憶들」 『韓國女性學』 二十三 (韓國女性學會, 二〇〇七年) 一八〇頁。
- (68) 岩谷めぐみ 「韓國における論介と春香の受容」 『大衆文化』 一 (立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター, 二〇〇四年) 六九頁。
- (69) 金文吉 「壬辰倭亂을 文化戰爭이다」 (慧眼, 一九九五年) 七一—七十二頁。
- (70) 鄭棟柱 「晋州城 戰鬪와 論介」, 七六—七八頁。
- (71) 同前, 七七頁。
- (72) 『備辺司膳録』 七集, 景宗二年五月條。
- (73) 金守業, 前掲書, 八三頁。
- (74) 高廷憲 「湖南節義錄」 『湖南地方壬辰倭亂史料集』 (全羅南道, 一九九〇年)。
- (75) 金守業, 前掲書, 八六頁。
- (76) 同前, 八六—八九頁。
- (77) 村上重良 「慰靈と招魂——靖国の思想」 (岩波書店, 一九七四年) 五一—五五頁。
- (78) 一九〇二年生まれ。忠南天安出身。梨花学堂の学生として一九一九年、三一独立運動に参加、一九二〇年西大門刑務所で残酷な拷問により獄死したとされる。一九六二年、韓国政府がその功績を認めて建国勲章を授与し、独立烈士と呼ばれるようになった。天安市の生家近くには柳寛順烈士記念祠堂が設けられ、西大門刑務所も歴史館として一般公開されている。
- (79) 尹成孝, 前掲書, 一六二頁。
- (80) 鄭棟柱, 前掲書, 八一頁。

- (81) 村の入口にある六助の墓碑には、彼が武士であった頃の名前である木田孫兵衛が刻まれている。だが、建立日は明治十四年（一八八一）甲辰四日となっている。

(82) 『晋州新聞』一九九八年八月二十四日付。

(83) 金守業、前掲書、一〇七頁。

(84) 同前、一〇七頁。

(85) 『晋州新聞』二〇〇三年六月八日付。

(86) 박노규、前掲書、二五三頁。

(87) 丁若鏞『與猶堂全書』二（麗江出版社、一九九二年）四三四～四三五頁。

(88) 鄭智泳「壬辰倭乱以後の女性教育과 새로운 忠의 登場」『国学研究』十八（韓国国学振興院、二〇一一年）一七一頁。

(89) 신익철外三人訳『於于野談』（돌베개、二〇〇六年）四三頁。

(90) 박기용、前掲書、一九六頁。

(91) 李慶馥「晋州妓와 論介의 後裔들——晋州券番을 중심으로」『伝統文化研究』二（明知大学校韓国伝統文化研究所、一九八四年）一六六頁。

(92) 崔官、前掲書、二七八頁。

参考文献

- 姜大敏「論介의 生涯와 歴史的 意味」『論介事跡研究』（慶星大郷土文化研究所、一九九六年）
- 강병주「日本에 論介의 墓가 있다」『晋州文化』二十二（晋州文化院、一九九七年）
- 高廷憲「湖南節義錄」『湖南地方壬辰倭乱史料集』（全羅南道、一九九〇年）
- 金京欄「大功艷書合考——貴田孫兵衛（毛谷村六助）と朝鮮の女性をめぐって」『日本語文学』二十六（日本語学会、二〇〇四年）
- 金茂祚「通過儀礼를 통하여 본 論介의 生涯」『論介事跡研究』（慶星大郷土文

化研究所、一九九六年）

金文吉、「壬辰倭乱」文化戦争이다」（慧眼、一九九五年）

金美淑「朝鮮後期 晋州 劍舞 研究」『韓国舞踊研究』二十四—一（韓国舞踊研究会、二〇〇六年）

金守業「論介」（知識産業社、二〇〇一年）

박기용「論介說話의 叙事 展開 樣相과 意味」『우리말글』三十二（우리말글学会、二〇〇四年）

박노규「論介와 倭將의 靈魂結婚（또는 詐欺結婚）」『月刊朝鮮』八（朝鮮日報社、一九九九年）

Vladimir Tikhonov（박노자）「義妓 論介傳承——戰爭、道德、女性」『溯上古典研究』二十五（溯上古典研究会、二〇〇七年）

朴鍾和「論介와 桂月香」（參中堂、一九六二年）

신익철外三人訳『於于野談』（돌베개、二〇〇六年）

尹成孝「論介를 辱되게 하지 말라」『人物과 思想』五（人物과 思想社、一九九九年）

李慶馥「晋州妓와 論介의 後裔들——晋州券番을 중심으로」『伝統文化研究』二（明知大学校韓国伝統文化研究所、一九八四年）

鄭棟柱「晋州城 戰鬪와 論介」『南冥學 研究』七（慶尚大南冥學研究所、一九九七年）

鄭棟柱「反外勢鬪爭의 表象 論介」『WIN』二四—（一九九七年五月）

鄭飛石「名妓列伝 一四話」（韓国出版社、一九八二年）

鄭飛石「美人別曲五卷（論介編）」（高麗苑、一九八九年）

丁若鏞『與猶堂全書』二（麗江出版社、一九九二年）

정주석、정기영「全羅北道金石文大系」二（全北歴史文化学会、二〇〇八年）

鄭智泳「論介와 桂月香의 죽음을 다시 記憶하기——朝鮮時代 義妓의 誕生과 排除된 記憶들」『韓國女性學』二十三（韓國女性学会、二〇〇七年）

鄭智泳「壬辰倭乱以後の女性教育과 새로운 忠의 登場」『国学研究』十八（韓

国文学振興院、二〇一一年)

鄭出憲「壬辰倭乱の英雄을 記憶하는 두 개의 様式」『漢文学報』二十一(우리漢文学会、二〇〇九年)

崔官「日本近世文学에 있어서 壬辰倭乱과 毛谷村六助」『日本語文学』三(日本語文学会、一九九七年)

하장진「晋州 矗石樓 題詠詩의 題材的 性格」『韓國文学論叢』五十(韓國文学會、二〇〇八年)

芦馬豊雲編著『郷土田川「史録」 毛谷村六助「貴田孫兵衛」伝』(吟詠道無相 豊雲流総本部、一九九一年)

荒山徹「サラン 故郷忘じたく候」(文藝春秋、二〇〇八年)

岩谷めぐみ「韓国における論介と春香の受容」『大衆文化』一(立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター、二〇〇四年)

岩谷めぐみ「論介における説話の変遷——韓国の地域感情及び日韓の社会情勢からの考察」『立教大学日本学研究所年報』四(立教大学日本学研究所、二〇〇五年)

岩谷めぐみ「郷里における毛谷村六助と論介——福岡県郷土紙〈かみつの〉をめぐって」『立教大学日本文学』一〇九(立教大学、二〇一三年)

金子尚一「ノンゲ悲話における毛谷村六助」『国文学解釈と鑑賞』五十九—(至文堂、一九九四年)

川村湊「妓生——「もの言う花」の文化誌」(作品社、二〇〇一年)

金京欄「韓国の〈論介〉説話と浄琉璃〈大功艶書合〉及び改作について」『演劇研究センター紀要』五(早稲田大学二十一世紀COEプログラム、二〇〇五年)

下毛郡教育会『下毛郡史』(下毛郡、一九七二年)

中野嘉太郎『加藤清正傳』(新潮社、一九七九年)

長野寛、朴成壽「韓国——檀君神話と英彦山開山伝承の謎」(海鳥社、一九九六年)

長野寛「毛谷村六助の実像と虚像を求めて——毛谷村の山里探訪」(西日本文化サークル、二〇〇三年)

武内確齋「絵本太閤記」下(有朋堂、一九一七年)

田畑博子「彦山権現誓助剣論——毛谷村六助と論介」『国文学解釈と鑑賞』六十一—五(至文堂、一九九六年)

村上重良「慰霊と招魂——靖国の思想」(岩波書店、一九七四年)